

## 《苦吟》前史

### ——初盛唐期の詩人達をめぐって——

岡田充博

#### 一 はじめに

中晩唐期の詩壇に顕著な風潮の一つとして詩人達の詩作への耽溺、あるいは詩作に当っての過度とも言える呻吟が挙げられることは、周知のとおりである。賈島の「推敲」の故事に代表され、一般には「苦吟の風潮」として知られるこの現象について、以前、私は「中晩唐期に見られる詩文学への没頭の風潮について」<sup>(1)</sup>と題する拙論において考察を試みたことがある。

その結果、私が確認し得たのは、基本的にはおおよそ次のような点についてであった。

1…所謂「苦吟」のエピソードを中心とした、中晩唐期の詩人達の詩作への耽溺を詳細に検討してみると、必ずしも遅筆な呻吟ばかりとは限らない。詩に対する常軌を逸した愛好癖、あるいは速筆多作なタイプの耽溺なども一方に見られる。したがって、この風潮をこれら全てを含んだ包括的な形で把握しようとするならば、

「盛唐詩の世界からの脱皮を目指した中晩唐期の詩人達の、佳句を得るための呻吟」といった、従来の単純な理解では不十分なものになる。

2…創作に当っての没頭・呻吟は、程度の差はあれ、古今の文学者に共通のものであって、何も中晩唐期の詩人達のみに限られるわけではない。だとすれば、この風潮は、「何故この時期の詩人達だけが詩作に没頭し呻吟したのか」という形で問われるべきではなく、「この時期、詩人達の詩作への没頭・呻吟に拍車がかかれ、一つの風潮を形作るほどの急激な顕在化が見られたのは何故か」という形で問われるべきであろう。

3…右の問題を解くためには、文学的な、あるいは社会的政治制度的な種々の要因についての幅広い考察が必要であろう。ただ、今仮に対象を詩人達の文学的自覚という点のみに絞って考えてみるならば、「それまではマイナス評価を与えられがちであった詩作への没頭・呻吟という行為が、この時期の詩人達において初め

て、様々な高い価値意識を伴って自覚されるようになった」という重要な変化を指摘できる。

4…この様々な価値意識とは、具体的には例えば、①耽溺・呻吟こそが優れた作品を生み出すという、技術論的な自覚、②芸術的な衝動・創造の喜びの自覚、③文学に極めて高い価値を置く伝統的な思想に支えられた、詩人としての自覚・意識、④耽溺・呻吟による優れた作品の創出が出世登用に結びつくという、現実的功利的な意識、⑤詩作への耽溺・呻吟を、世俗に背を向けた隠士処士の高潔な行為と見なす価値意識、⑥詩作への耽溺・呻吟を、禅などの仏教思想と結びつけて高く評価する価値意識、等々である。これらに注目することによって、この風潮を、いわば内的な側面から説明してゆくことも可能であろう。

5…また、中晩唐詩壇のこの風潮のなかには、△苦吟▽的傾向（呻吟型・苦惱型の詩作への耽溺。例えば、賈島・孟郊・李賀など）と、△閑吟▽的傾向（詩作に耽溺しながらも、一方でそれを、精神的な余裕と落ち着きを備えた閑適的な意境の下に留めておこうとする性向を持つタイプ。例えば、白居易・陸龜蒙など）の二つの傾向を見出すことができる。両者には互いに融合しあう側面もあり、截然と分離して定義できるわけではない。しかし、右の二つの傾向を軸とした考察は、この風潮の実態・歴史的な消長の解明に極めて有効と思われる。

旧稿に示したこのような観点に立って、私は今後しばらく継続的に、中晩唐期の詩人達の詩作への耽溺について論じてみたいと考えている。本稿は、その序論的な意味合いを兼ねて、時代を初盛唐期に遡り、この風潮の萌芽・源流を探ろうとするものである。

なお、旧稿において私は、中晩唐期のこの風潮をさして「詩文学への没頭的風潮」、あるいは略して「△詩▽的風潮」等の呼称を用いたが、その後幾人かの方々から、奇異な感じがして馴染めないとの御意見をいただいた。実を言うと、私自身もこの造語に対しては落ち着きの悪さを感じていたので、本稿を執筆するに当たって、あらためて呼称を考え直してみた。しかし、なかなか適当な表現が見つからず、結局止むを得ず、仮に「《苦吟》の風潮」と呼んでおくことにした。（その結果、三つの「苦吟」を使い分けることになり、返って混乱を招きかねない恐れもあるが、耳慣れた言葉を用いるとなるとやはりこれしか思いつかなかった。）ただ、以下の文中では必ずしもこの用語にこだわらず、必要に応じて「△苦吟▽△閑吟▽の風潮」等の別の表現でもこの風潮を呼ぶことにするが、要するに指し示すところは、遅筆・速筆、△苦吟▽・△閑吟▽いずれをも含めた可能な限り広い範囲での、詩人達の詩作への没頭・耽溺に他ならない。

また、本稿の中で用いる△苦吟▽および△閑吟▽の語は、共に従来の一般的な意味内容とは些か異なった、私なりの内容規定の下で使用している。その概略は、先の個条書きの項目5の括弧内に述べたとおりであるが、詳しくは拙稿「中晩唐期に見られる詩文学への没頭的風潮について」および「中晩唐期△閑吟▽覚え書き」を参照されたい。<sup>(2)</sup>

## 二 初唐期

すでに述べたように、創作にあたっての没頭・呻吟が、程度の差はあれ、古今の文学者に共通のものである以上、同様の行為は中晩唐期以前にも存在したはずである。ここでは先ず、初唐期を対象としてその実情について考察してみることにはしたい。

初唐期の文学者に関する伝記資料の中から没頭・呻吟にまつわるエピソードを拾い出すとすれば、次の二つが挙げられよう。

褚遂良 太宗の哀冊文を為りしとき、朝より還るに馬誤つて人家に入るも覺らず。  
〔隋唐嘉話〕<sup>(3)</sup> 卷中

崔融 文を為ること典麗にして、当時その比あること罕なり。朝廷の須むるところの「洛 宝函を出すの頌」「則天哀冊文」及び諸々の大手筆は、並びに手ずから敕して融に付す。哀冊文を撰し、思を用うること精苦にして、遂に病を発して卒す。

〔旧唐書〕<sup>(4)</sup> 卷九四

前者の褚遂良（五九六―六五八）のエピソードから直ちに連想されるのは、賈島の「推敲」の故事であろう。この故事については、史実ではなく、フィクションの可能性が大きいことがすでに指摘されているが、<sup>(5)</sup> そうだとすれば、その原型はここらあたり求められるかもしれない。また、後者の崔融（六五二―七〇五）のエピソードについて言うならば、これほど極端な呻吟の例は中晩唐期の詩人達にも一寸見当らない。強いて挙げるとすれば、性格は異なるけれども、「この児要らず当に心を嘔き出して始めて已まんのみ」と母を嘆かせ、終には夭折した李賀の苦吟が、わずかにこれに匹敵しうるであろうか。いずれにしても、この二つの逸話が私達に教えてくれるのは、中晩唐期の苦吟に勝るとも劣らない前例が、初唐期にすでに存在するという事実である。

ただ、問題は右の二つの逸話がいずれも「文」にまつわるものであって、「詩」に関するものではない点であろう。実を言うと、初唐期の文学者の創作への没頭・呻吟を伝えるエピソードは、管見の限りではこの二例のみで、詩作に関するものは見当らない。<sup>(7)</sup> となると、私達は

ここで視点を「詩」に絞って、もう少し踏み込んだ考察をしておく必要がある。

では、初唐期に詩作にまつわる没頭・呻吟のエピソードが見られないのは、一体何故であろうか。

第一に考えられるのは、この時期においては「詩」というジャンルが、「文」に匹敵しうるだけの文学的・社会的価値をまだ獲得するに至っておらず、したがって、没頭・耽溺すべき対象とは必ずしも見なされていなかった、という点であろう。

初唐期、「詩」が文学の諸ジャンルのうちで占める位置は、確かに急速に上昇していった。しかし一方、南朝宮体詩の趣味的座輿的な軽文学の性格がなお色濃く残っていたことも事実であり、「詩」は、当時の通念としては、「文」を圧して完全に文学の王座に就くには至っていなかったように思われる。現に、先の褚遂良や崔融においても、詩はあくまでも余技だったらしく、現存する作品数も文に比べて格段に少ない上に、質的にも高いとは言えない。苦吟的資質の持主とはいえ、朝廷の「大手筆」と篇詠とでは、その創作態度には自ら大きな隔たりがあったのである。

第二には、詩文制作（わけても詩作）の際における極端な没頭・呻吟が、この時期においてはまだ優れた創作態度として一般に認識されるには至っていなかった、という点が挙げられよう。例えば、初唐の文学者達の伝記資料のなかから創作にまつわるエピソードを拾い上げてみると、遅筆ないわゆる「苦吟」とは逆の、速筆・速吟に関するものが目を引く。（その幾つかを左に掲げておくことにする。）初唐期、人々の喝采を浴びたのは、そうした打てば響くような文学的才能であって、佳句を求めての没頭やそれに伴う生みの苦しみではなかった

のである。

(楊)師道 草隸を善くし、詩に工たくみにして、毎つねに有名の士と燕集し、歌詠自適す。帝 其の詩を見、為ために謔たがひ嗟賞す。後、宴を賜たまはるに、帝曰く「聞く、公 酣賞かんしょうする毎ごとに筆を捉りて詩を賦し、宿構しゆくこうせるが如しと。試みに朕が為ために之これを為なせ」と。師道 再拜し、少選しうせんにして輒すなわち成るも、竄定そんじやうする所なければ、一坐嗟伏す。

〔『新唐書』卷一〇〇〕

陳叔達 ；頗る才学有り、陳に在りて義陽王に封ぜらる。年十余歳にして嘗て宴に侍りしに、詩十韻を賦し、筆を援りて便ち就る。僕射の徐陵 甚だ之これを奇とす。

〔『旧唐書』卷六一〕

袁朗 ；陳に在りて褐を秘書郎に積たき、甚だ尚書令の江総の重んずる所と為る。嘗て千字の詩を製り、当時以て盛作と為す。陳の後主 聞きて召して禁中に入れ、月の賦を為つくらしむるに、朗 翰あてを染めて立ちどころに成る。

〔『旧唐書』卷一九〇〕

王勃 凡そ文を作らんと欲すれば、先ず墨を磨らしむること数升、酒を飲むこと数盃にして、被を以て面を覆いて寝ぬ。既に寤さめ筆を援れば成り、文は点を加えず。時人 謂いて腹藁と為す。

〔『唐語林』卷二〕

(張)鷟 下筆敏速にして、著述 尤も多し。

〔『旧唐書』卷一四九〕

ただ、このような「速筆」「速吟」が尊ばれる風潮にあったとはいえ、この時期、詩作における労苦・没頭が全く無かったと考えるのは不自然であろう。時代は遡るけれども、梁の鍾嶸の『詩品』序に見える次のような記事によれば、詩作における没頭・呻吟は、南朝齊梁の詩壇において既に一つの風潮を成すに至っている。

今の士俗 斯この風熾まかんにして、纒むすかに能く衣に勝え、甫はめて小学に就けば、必ず甘心して馳驚す。是こゝに於て庸音雜体、人各おのおの容かたちを為し、膏腴の子弟をして文の逮およばざるを恥じ、終朝点綴し、分夜呻吟せしむるに至る。

鍾嶸は、詩の流行がもたらした弊害として、この風潮を批判的な目で捕えているのであるが、それはともかくとして、私達はここから、六朝末期、詩というジャンルが実質上ここまでの発展を見せ、その創作に当っては、多くの修練と労力を必要とする水準にまで既に達していたことを知ることができる。だとすれば、六朝詩を批判的に継承しつつさらに高度な新しい叙情世界の完成を目指した初唐期の詩壇において、そうした創作上の労苦が全く存在しなかったということはあり得ない。エピソードとして後世に伝えられることはなかったにせよ、あるいは中晩唐の詩人達ほどの呻吟・耽溺はなかったにせよ、初唐期の詩人達もまた、それぞれの胸のうちに人知れず秘める形で、そうした体験を持っていたのである。

初唐期の詩人達と創作上の労苦・没頭については、おおよそ以上述べたとおりであると考えられるが、本節を終える前にここでもう一つ、陳子昂(六六一―七〇二)の「南山家園林木交映夏五月幽然清涼独坐思遠率成十韻」詩について触れておかねばなるまい。

拙稿「『苦吟』再考」において既に指摘したように、この作品は管見の限りでは、「苦吟」という言葉の最も早い使用例の一つであり、注目に値する。その後半部を左に挙げてみよう。

忘機委人代 機を忘れて人の代に委ね

閉牖察天心 牖を閉じて天心を察す

蛺蝶憐紅葉 蛺蝶 紅葉を憐み



彼の「速吟」を伝えるものである。

開元中、李翰林 詔に応じて「白蓮の花開くの序」及び「宮詞十首」を草す。時に方に大酔したれば、中貴人 冷水を以て之に沃ぎ、稍く醒む。白 御前において筆を索めて一たび揮い、文に点を加えず。

〔唐撫言〕卷一三・敏捷

李白 天才俊逸の誉有り。人と談論する毎に、皆句読を成し、春葩麗藻の如く、齒牙の下に粲たり。時人 号して「粲花の論」と曰う。

〔開元天宝遺事〕卷下

不見李生久 李生を見ざること久し

佯狂真可哀 佯狂 真に哀れむべし

敏捷詩千首 敏捷 詩千首

飄零酒一杯 飄零 酒一杯

〔杜甫「不見」〕

この他、盛唐前期における「速筆」「速吟」の記事としては、次のような資料が挙げられる。

(孫) 逖 幼くして英俊、文思敏速たり。始め年十五にして雍州長史の崔日用に謁す。日用 之を小として土火炉の賦を為らしむ。逖 翰を握れば即ち成り、詞理典瞻たり。日用 之を覽て駭然とし、遂に忘年の交を為し、是を以て價益益々重し。

〔旧唐書〕卷一九〇中・文苑伝

天宝中、漢州雒原の尉の張陟 一芸に応じ、自挙するに「日に萬言を試みん」と。中書の考試を須む。陟 書を善くする者三十人をして各々紙を操り筆を執りて席に就き、庭を環りて坐し、俱に題目を占らしむ。身は自ら巡歴して、題に依りて口授し、言訖

れば即ち過ぎ、周くして復た始め、午後に至りて詩筆俱に成り、七千余字を得たり。仍お萬に満たさんことを請う。宰相云う、「七千は多しと謂う可し。何ぞ必ずしも萬を須いん」と。具さに状を以て聞ゆ。敕して縑帛を賜い、広文館に直さしむ。時に張萬言と号す。

〔封氏聞見記〕卷一〇

史青は零陵の人にして、聰敏強記なり。開元の初め、上書して自ら詩を能くすと薦め、「子建は七步なるも、臣は五步の内に明詔を塞ぐ可し」と。明皇 試みるに「除夕」「上元竹火籠」等の詩を以てするに、口に應じて出づ。上 称賞し、左監門衛將軍を授く。

〔全唐詩〕卷一一五

しかし一方、この時期の詩人達の詩作への没頭・労苦を伝える資料も、実は僅かながら拾い出すことができる。左にそれを挙げてみることにしよう。

(崔) 顥 吟詠に苦り、病より起きて清虚に当る。友人 戯れて曰く、「子の病みて此の如くなるに非ず。乃ち吟詩に苦りて瘦するのみ」と。遂に口實と為る。〔唐才子伝〕卷一

孟浩然 眉毫 尽く落ち、裴祐は袖手して衣袖穿つに至り、王維は醋甕に走り入るに至る。皆 苦吟せし者なり。

〔雲仙雜記〕

ただ、これらの資料を扱う際に、私達が注意しなければならぬのは、いずれも信憑性についての確認の手續が必要とされる点である。というのは、右に示した記事を載せる文献は、ともに《苦吟》の風潮が盛んとなった中唐期以降のものであり、そうした風潮のなかで作られたフィクションの可能性が考えられるからである。そこで些か面倒ではあるけれども、右の詩人達の詩作態度について、以下、逐一

検討を加えておくことにする。

先ず最初の崔顥（？～七五四）について、『唐才子伝』が伝えるこのエピソードは極めて興味深い、彼に関する他の資料には類話が全く見当たらず、出所が明らかでない<sup>(15)</sup>。また、現存する彼の詩文にも、自身の詩作態度について語った記述はない。残念ながらこの逸話は、いまひとつ信憑性に欠けるようである。

次に、『雲仙雜記』の記事のうち、孟浩然（六八九～七四〇）について。孟浩然に関する伝記資料には、他にこうしたエピソードを載せるものはなく、やはりそのまま信用するわけにはゆかない。しかし、彼がそうした逸話を生みそうなタイプの詩人だったことは、同時代人の確実な資料によって推測できる。例えば、孟浩然の詩集の編纂者である王士源が記したその序文（天宝五～八年頃の作）には、次のような一節が見られる。

浩然、詩を為る毎に興を待ちて作る。故に或いは成ること遅し。：常に自ら嘆ぜり、文を為るは意に速ばずと<sup>(16)</sup>。

ここに示されているのは、表現の困難さを十分知り尽くした、遅筆な沈思型の詩人の姿である。『雲仙雜記』の記事が事実を伝えているか否かは別として、孟浩然がいわゆる苦吟タイプの詩人であったことは、ほぼ確実であろう<sup>(17)</sup>。

ただ、その彼も、自身の詩作については、若年の頃の修学を回想した句のなかで僅かに触れているのみであり、詩作に伴なう労苦を直接吐露した作品は見当らない<sup>(18)</sup>。つまりこの孟浩然においても、詩作上の労苦はなお、積極的な意味合いで自覚され主張されるには至っていない。「文を為るは意に速ばず」という嘆きの下、完璧な表現に一步でも近付くための試練として、彼もまた独り秘かにこの試練に耐えてい

たのである。

ここで、先の王士源の序文をもう一度振り返ってみよう。「詩を為る毎に興を待ちて作る。故に或いは成ること遅し」という、遅筆を弁護する一節の存在は、逆に言えば、それが当時一般には、マイナス評価の要素だったことを物語るものである。また、王士源の弁護の控え目な口調から推測すると、詩作における沈思・熟考の重要性についての自覚はあったものの、彼にもやはり、それを積極的に押し出し主張するまでの文学思想はなかったようである。

次に見える裴祐（？～？）は、孟浩然・王維と並べて論じられているところからすると、恐らく盛唐の詩人であろうが、伝記資料も作品も他には一切見当たらない<sup>(19)</sup>。これ以上検討を加える術もないので、先の崔顥の場合と同様、疑問符付きの参考資料として扱わざるを得ないであろう。

最後に、王維（六九八？～七六一）について。このエピソードも、他の資料には全く見当たらない。現存する王維の詩文にも彼の苦吟を示す傍証になるようなものはなく、事の真偽についてはやはり保留せざるをえない。

ただ、この王維の記事に関連して注目されるのは、彼と親交のあった裴迪（七一六？）・祖詠（六九九～七四六？）に関する次のような資料が残っている点である。

知君苦思縁詩瘦  
太向交游萬事慵

知る 君が苦思して詩に縁りて瘦せ  
太た交遊に向かいて万事慵きを

（杜甫「暮登四安寺鐘樓寄裴十迪」）

（祖）詠の詩は、剪刻省静にして、用思に尤も苦しむ。

（殷璠『河岳英靈集』卷下）

前者の杜甫の詩句には、実は諧謔的な口吻もこめられており、嚴密に言えば後者の論評ほどの客観性は持ち合わせていない。しかし、裴迪が平生「苦思」することの多い詩人だったという前提があつてこそ、この諧謔も生きてくるのであり、字面通りに受け取ることは避けねばならないにしても、同時代人の証言として、殷璠の指摘とともに信頼するに足りよう。

ところで、彼らがこのような苦吟タイプの詩人だったとすれば、同じグループに属する一人として、王維にも同様な傾向があつた可能性は有り得ないだろうか。<sup>(20)</sup>あるいは、遅筆な苦吟タイプではなかつたとしても、閑適的な詩世界への耽溺ということであれば、彼がそうした資質の持ち主であつたことは、『旧唐書』の次の記事から容易に想像されよう。

王維：宋之問が藍田の別墅を得たり。墅は輞口に在り。水を舎下に周らせ、別に竹洲花塢に漲く。道友裴迪と舟を浮かべて往来し、琴を弾じ詩を賦し、嘯詠して日を終う。

(卷一九〇下・文苑伝)

だとすれば、ここで『雲仙雜記』の逸話を次のように読み替えてみてはどうだろう。つまり、この話は、王維を中心とする詩人グループの苦吟的・耽溺的な傾向が、王維個人の名を借り、その苦吟的側面に専ら力点を置く形を取ることによって成立している、と。このように考えるならば、王維の逸話が持つ資料としての価値には、なお軽視できないものがあるように思われる。

盛唐前期の詩人達の詩作上の労苦・没頭に関する資料は、管見の限りでは以上が全てである。『唐才子伝』『雲仙雜記』の記事は、結局いずれも真偽のほどが明らかでないけれども、注意深く検討を重ねて行

くことによつて資料的な価値を引き出すことも可能であり、ほとんど手掛かりのなかつた初唐期に比べれば、現象は随分水面近くに浮上してきた感がある。加えて興味深いのは、ここまでの考察で拾い上げてきた資料が、所謂「自然詩人」に集中している点である。

これは単なる偶然であろうか。恐らくはそうではあるまい。そこには、そうなるべき何らかの必然的な理由で潜んでいるように思われる。今、試みにその理由について考えてみるならば、第一には、自然詩というジャンルに固有の詩作の難しさが挙げられよう。様々な表情を見せる自然界を描写しながら、そこに自己の心境を巧みに織り込んでゆく自然詠の世界は、高揚した感情を一気呵成に歌い上げる場合とは異なり、景情一致のための高度な表現技術と、自己の内面への深い沈潜が必要とされる。六朝期の自然詩を超え、このジャンルに飛躍的な発展をもたらすために、彼ら盛唐の詩人達が費やさなければならなかつた努力には、多大なものがあつたのではないだろうか。

さらに理由の第二としては、前節の陳子昂の詩の考察において触れた、隠逸的・脱俗の世界との結びつきという点が挙げられる。隠逸的・脱俗的な志向をもつ精神にとつて、自然は俗塵を避けて安らぐべき場所であり、その自然のなかで営まれる高雅な生活の象徴こそが、琴絃であり詩歌であつた。例えば、孟浩然や王維の作品のうちにも、それを示す詩句は散見される。

壺酒朋情洽 壺酒 朋情洽  
琴歌野興間 琴歌 野興間

(孟浩然「遊鳳林寺西嶺」)

苔潤春泉滿 苔潤 春泉滿  
蘿軒夜月間 蘿軒 夜月間



能令許玄度 能く許玄度をして

吟臥不知還 吟臥して還るを知らざらしむ

(孟浩然「宿立公房」)

周遊清蔭徧

周遊して清蔭徧く

吟臥夕陽曛

吟臥すれば夕陽曛る

(孟浩然「同王九題就師山房」)

静中何所得

静中 何の得る所ぞ

吟詠也徒哉

吟詠 也た徒らならんや

(孟浩然「來闍黎新亭作」)

独坐幽篁裏

独り坐す 幽篁の裏

弹琴復長嘯

弹琴 復た長嘯す

(王維「竹里館」)

風景日夕佳

風景 日夕に佳く

与君賦新詩

君と与に新詩を賦す

(王維「贈裴十迪」)

時吟招隱詩

時に招隱の詩を吟じ

或製問居賦

或は問居の賦を製す

(王維「丁寓田家有贈」)

隱逸的脱俗的な世界と結びついた、高い価値意識によって詩作行為が支えられ、「吟臥して還るを知らず」といった態度が高士として称えられるとすれば、そうした価値意識に支えられて詩作に傾注する自然詩人達のなかから、過度の没頭・耽溺へと進む人々が現われても不思議はない。文学的自覚ないしは文学思想としては、なお明瞭な形を取るまでには至っていないけれども、詩作への没頭を生み出し、それを思想的に支える土壌は、こうした精神世界の内に既に準備されている。

たと考えられるのである。

このように見てくると、彼ら盛唐期の自然詩人達の存在は、中唐以降の「苦吟」および「閑吟」の風潮（『苦吟』の風潮）の一つの源流として、新たな姿で浮び上がって行くことになる。従来、盛唐前期の詩人達の詩作態度について、こうした観点から注目されることはほとんど無かったと言ってよい。しかし、この時代においても、『苦吟』の源流・萌芽となる動きは確実に存在し、育ちつつあったのである。

なお、盛唐期の詩人達の詩作上の苦心・労苦に関連して、ここで羅宗強氏の『隋唐五代文学思想史』（上海古籍出版社）に見える興味深い指摘を紹介しておきたい。

氏は、「速吟」をもって知られる天才詩人李白にも、詩作における「提煉」（『精鍊』）はあったとされ、それについて次のように述べられる。

李詩之所以達到了朴素自然之美、實是提煉的結果、是芸術上的一種自覺追求。不過、這種芸術提煉之工、更多的属于芸術構思過程中的、更少煉字煉句的工夫、更多的属于才氣縱橫与芸術素養的深厚、芸術技巧的高度成熟的產物、而不是苦吟的結果。因此、雖為芸術提煉、而仍表現為一揮而就、表現出毫無人工痕跡。

(一一四頁)

十分な検討を経た後でなければ確かなことは言えないが、詩作品の「提煉」におけるこうした傾向は、李白のみに限らず、この時期の詩人達全般にも或る程度当て嵌るのではないだろうか。

盛唐前期の詩人達の用いる言葉が概ね平明であること、類似した表現の頻用や先人の詩句のそのままの借用がしばしば見られること等

は、かねてから指摘されている通りである。<sup>(21)</sup>だとすれば、彼らの詩作上の苦心は、一字一句の彫琢よりも、むしろ全体的な表現・構想の問題に比重が置かれることが多かったようにも思われる。無論、事柄はそれほど単純に割り切れる性格のものではないであろうが、この推測がそれなりの妥当性を持つとすれば、一口に詩作における苦心・労苦とは言っても、盛唐前期と中晩唐期の詩人達との間では、質的な差異をも考えねばならない訳であり、こうした角度からの再検討も必要となつてこよう。

現在の私にはこの点について論ずる準備がなく、ここでは単なる指摘に留めざるを得ない。しかし今後、《苦吟》のより詳細な考察に進むとすれば、その過程でいづれ改めて浮かび上がってくる問題であろう。

#### 四 盛唐後期（～中唐初期）

本節では、安祿山の乱以降の盛唐後半期を考察の対象とし、続く中唐初の代宗大暦（七六六～七七九）年間についても併せて瞥見しておくことにしたい。

この時期の詩人達のなかで突出した存在は、何といても杜甫（七一〇～七七〇）であろうが、《苦吟》の歴史の中にあっても、彼は極めて重要な位置を占める。

すでに幾人かの研究者によって指摘されているように、詩作における苦心・没頭的な姿勢を、詩人としての自負とともに公然と表明したのは、彼に始まる。その例としてしばしば引用されるのが、次の詩句である。

為人性僻耽佳句 人と為り性僻にして佳句に耽り

語不驚人死不休

語 人を驚かさずんば死すとも休めず

（江上値水如海勢聊短述）

陶冶性靈存底物

性靈を陶冶するは底物か存す

新詩改罷自長吟

新詩 改め罷みて自ら長吟す

熟知二謝將能事

二謝の能事を將てせるを熟知し

頗學陰何苦用心

頗る學ぶ 陰何の苦に心を用いしを

（「解悶十二首」其七）

また、晩唐の孟棻の『本事詩』が載せる李白の「戲贈杜甫」詩は、後人の偽作とされるが、<sup>(22)</sup>中晩唐期の人々の目に映った杜甫像として、ここにも彼の風貌の一端を窺うことは可能であろう。

飯顆山頭逢杜甫

飯顆山頭に杜甫に逢うに

頭戴笠子日卓午

頭に笠子を戴き日は卓午

借問別來太瘦生

借問す 別來 太だ瘦生たる

總為從前作詩苦

總て從前詩を作る苦しみの為ならん

ところで、杜甫のこのような詩作行為を支える自覚とは、どのようなものだったのであろうか。

自らの《苦吟》的詩作態度について杜甫が述べるところは、ほぼ右の二例に尽き、その背後にどのような文学的自覚があったのかを正確に把握することは難しい。しかし、安史の乱を境とする激動の時代の証人として幾多の名作を残し、「詩史」とも称される彼の詩人としての生涯をそこに重ね合わせてみるならば、彼自身の詩作への没頭を支える自覚のなかに、前節の自然詩人達に見られたような隠逸的脱俗的な価値意識が、大きな存在としてあったとは考えにくい。恐らくは、よりオーソドックスな儒教的文学観を基盤とした自覚・自負と、創作体験を通じて得られた詩に対する深い信頼と愛着とによって、それは支

えられていたのではないだろうか。

ただ、隠逸的脱俗的な価値意識とは一線を画する地点に自らの詩精神を置きながらも、杜甫はそうした価値意識に支えられた文学観を決して排除してはいない。例えば、先の「解悶」詩の「性靈を陶冶」するといった文学的自覚に見られる内省的な性格などは、恐らく当時の自然詩人達の文学思想と共通する側面を持っていようし、また、前節で引用した「裴迪に寄す」詩の「知る君が苦思して詩に縁りて瘦せ、太だ交遊に向かいて万事慵きを」の句には、自然詩人裴迪の脱俗的な苦吟に対する評価と理解が読み取れる。

さらに挙げるとすれば、隠士の阮某なる人物にあてて詠まれた「貽阮隱居」詩の次のような一聯がある。

清詩近道要 清詩 道の要に近く

識子用心苦 識る 子が用心の苦なるを

一首は阮某の隠士としての高潔な処世を称えており、ここに歌われている詩作への傾注とその成果としての「清詩」も、隠逸的生活と結びついた形で称讃の対象となっているのである。

儒をもって任ずる杜甫の詩観に、こうした隠逸的脱俗的な価値意識がみられること自体は、実はさほど異とするに足りない。しばしば指摘されるように、儒教思想は隠逸的処世を全否定するものではなく、むしろそれを容認し評価する一面を持っている。したがって、先の盛唐期の自然詩人達の隠逸的脱俗的な傾向にしても、彼らが儒としての自覚を持つこととは必ずしも矛盾しないし、杜甫がそれを高く評価するのも当然といえは当然の話であろう。むしろ、ここで注目したいのは、このような隠逸的脱俗的な世界と結びついた詩作への没頭もまた、杜甫に至って初めて、明確な価値意識とともに歌われるようになった

ったという点である。

前節で見たように、盛唐期の自然詩人達は、そうした価値意識の萌芽を内に持ちながらも、それを自らの作品のなかではっきりと表明するには至っていなかった。杜甫は、彼等のそうした半ば潜在的な「苦吟」ないしは「閑吟」を表面化させる一方、自らの詩作においては、隠逸的脱俗的な世界とは一線を画しながら、それをも含めたより包括的な形で《苦吟》の思想を築き上げていたのである。《苦吟》の歴史のなかで杜甫が果たした役割の決定的な重要さは、正にこの点にあるといえる。後の中唐元和期、《苦吟》の風潮の中心的存在となる詩人達を輩出した韓愈の文学集団において、杜甫が尊崇的となった事実ともあわせて、彼の文学的自覚・思想については、今後こうした観点からさらに詳細な検討が加えられる必要がある。

次に、この中唐初期、杜甫からやや遅れて活躍した詩人達について眺めてみると、忘れてはならない存在として詩僧の皎然（七三〇～七九九）がいる。彼には、詩論書の『詩式』が残されているが、そのなかに次のような一節が見られる。

又云う、「(詩は)苦思するを要さず。苦思すれば則ち自然の質を失う」と。此れ然らず。夫れ虎穴に入らずんば焉くんぞ虎子を得んや。取境の時は、須く至難至険にして始めて奇句を見、成篇の後には、其の気貌を觀るに、等間にして思わずして得るに似たる有り。此れ高手なり。

(取境)  
ここには、創作技術の観点からなされた、明確な《苦吟》の主張がある。

この他、彼の作品には、「市隱 何ぞ道を妨げん、禅樓 詩を癡さず」(酬崔侍御見贈)、「愛す 君が詩思の禅心を動かし、我をして

吟を休めて鶴吟を待たしむを」(「酬張明府」)など、禪の思想と詩との結びつきを示す句が散見される。先の『詩式』の主張と重ねあわせて考えるならば、仏教思想に支えられた〈閑吟〉の姿勢が、彼の詩作態度であったと思われる。中唐期以後、僧侶でありながら詩を能くする入詩僧の存在は俄に目を引くようになるが、後の無可(？)・可(？)・貫休(八五二〜九一三)・齊己(八六三？〜九三七？)など、自らの詩作への耽溺を歌う人々も少なくない。皎然を始めとして、彼等が《苦吟》の風潮の顕在化に果たした役割には、極めて重要なものがある。

さて、ここまで辿ってきて、私達は《苦吟》を支える幾つかの価値意識が、すでに形を整えて準備されていることに気付く。こうした価値意識が、どのような内的要因・外的情況によって形成されていったのか、あるいは、それが《苦吟》という一つの風潮を形作るに至る契機は何だったのか等々、課題として残る問題は依然大きい。少なくとも、価値意識の表面化という現象的な面に限って言えば、中唐元和期以降の《苦吟》の風潮は、最早目前だったのである。

## 五 おわりに

以上、初盛唐期を対象として、《苦吟》の源流を探ってみた。得られた成果は乏しいものであったけれども、この風潮の萌芽ともいえるべき幾つかの動向が、それに先立つ時代にすでに窺われることについては、従来の通説よりはいくらか詳細な形で明らかにすることができたと思う。

《苦吟》の源流としては、これまで専ら杜甫のみが取り上げられる傾向にあった。勿論、《苦吟》の歴史において彼が果たした役割の大き

さからすれば、それは一面当然でもあり、杜甫の重視自体が誤りというわけではない。しかし、小論において指摘したように、盛唐期の自然詩人や中唐期の詩僧もまた、同時に忘れてはならない存在であり、《苦吟》史上の杜甫の役割にしても、これとの関わりを考慮に入れることによってはじめ、一層明確な全体的評価が可能となるように思われる。考えてみれば、中唐期《苦吟》の代表格である賈島からして、本質的には自然詠の詩人であり、しかも嘗ては僧籍の身であった。あるいはここにも、単なる偶然の一致以上のものが潜んでいるのではないだろうか。

自然詩人や詩僧達に窺われるこうした伏流は、私の見通しでは、主として〈閑吟〉的な側面において、《苦吟》の性格とその潮流の方向づけに大きな影響を及ぼしている筈である。この点についても、いずれ準備を整えた上で、あらためて論じてみたいと考えている。

## 注

- (1) 『名古屋大学文学部研究論集』文学二六
  - (2) 『名古屋大学中国語学文学論集』第三輯
  - (3) 『隋唐嘉話』は、唐の劉餗の撰。彼の生卒年は明らかでないが、著名な歴史家劉知幾(六六一〜七二二)の息子であるところから、初唐末から盛唐にかけての人と推定される。つまり、このエピソードは、苦吟の話題がしばしば好んで取り上げられる中晚唐期より以前の出自を持つものであり(したがって、苦吟の風潮のなかで捏造されたフィクションの可能性はない)、信頼度はかなり高いと見てよいであろう。
- なお、この話は、他に『太平御覽』卷五九六に引く『国朝伝記』(同じく劉餗の撰とされる)、宋の王讜の『唐語林』卷二にも見える。旧稿「中晚唐期に見られる詩文学への没頭の風潮について」において、出典を『唐語林』とのみ記したのは、正確でなかった。

- (4) 崔融のこのエピソードについても、旧稿「中晚唐期に……」では『唐詩紀事』のみを出典として示したが、『旧唐書』『新唐書』にすでに見え、当時有名な話だったようである。彼の死因が果して哀冊文執筆の際の心労であったか否かはさておくとしても、この逸話が伝える彼の苦吟的資質については、事実として信用してよいであろう。
- (5) 例えば、最近の論考としては、金循華「推敲」故事真偽考」、『文学遺産』一九八七年第五期）、石帆「推敲」本事雑談」、『文学遺産』一九八七年第六期）などがある。
- (6) 李商隱「李賀小伝」もつとも、強いて挙げれば、皆無という訳でもない。例えば、元・辛文房『唐才子伝』の劉希夷の項には、次のような記事がある。
- (7) 希夷……苦篇詠、特善閨帷之作。（卷一）
- ただ、『旧唐書』『新唐書』『唐詩紀事』等のより古い資料には、劉希夷が「篇詠に苦った」ことの指摘は見られない。また、現存する彼の作品中にもそれを示すが手掛りがなく、確証が得られないので、本文において論ずることは見合わせた。
- (8) この他、唐・孟棻『本事詩』微異第五に見える宋之問の夜吟の話、宋・呉炯『五総志』に見える駱賓王が老僧の苦吟を助けた話などもあるが、いずれも晩唐以後の文献である上に、信憑性にも欠けるため、取り上げることはしなかった。しかし、初唐期の詩人達にも詩作における労苦・没頭があったであろうことは、これらの不確かな資料に拠るまでもなく明らかである。
- (9) この陳叔達のエピソードは、次の袁朗の話とともに、彼等が南朝の陳に仕えていた時のものであるが、唐代初期に活躍した詩人の「速吟」の例として掲げる分には、別に問題ないであろう。
- (10) なお、南朝の詩人達の「速吟」を伝えるエピソードは、この他にもしばしば見られ、初唐期との連続性が感じられる。

- (11) 「苦吟」再考」において述べたように、私個人はこの解釈には賛成できない。
- (12) 孫逖の生年は、則天武后の万歲通天元年（六九八）と推定される。彼が十五歳の時のこのエピソードは、したがって、睿宗の景雲元年（七一〇）のことになる。
- (13) この張陟の行為も一種の詩作への没頭であることに違いはないが、本稿が考察の対象としている秀句を生み出すための没頭、詩歌を愛好する余りの耽溺とは、性格が異なる。
- (14) 『全唐詩』小伝のこの記事が、何に基づくのかは未詳。識者の御教示を仰ぎたい。
- (15) 特に『雲仙雜記』は問題の多い文献であって、そのまま信用するわけにはゆかない。この書は別名を『雲仙散録』とも言い、晩唐の馮贄の作と伝えられるけれども、宋の王銍の偽作とする説が有力である。しかし、この苦吟の記事に関する限りは、無稽の談として退けてしまうには惜しいものを含んでいるように思われるので、敢えて取り上げて検討を加えることにした。私の考えでは、記事の内容そのものは信ずるに足りないかもしれないが、しかしだからといって、「そうしたエピソードの誕生自体が、孟浩然・王維等の所謂人自然詩人Vのグループに本来あった苦吟的資質を示しているのではないか」という点までも否定されるべきではない。それは丁度、賈島の「推敲」の故事が、フィクションでありながらこの詩人の本質を鋭く言い当てているのと同じではないだろうか。
- (16) 傳璇琮氏の『唐才子伝校箋』（中華書局）も「按此不知所本、俟考。」とする。
- (17) 引用は、京都大学所蔵宋刊本に拠った。『唐詩紀事』所引の文もこれに同じ。
- (18) 杜甫の「遣興五首」第五首にも「吾憐孟浩然、短褐即長夜。賦詩何必多、往往凌鮑謝。」とある。
- (19) 「書懷貽京邑同好」詩に「晝夜常自強、詞翰一作頗亦工」の句があるが、庾拳の為の勉字の回想であって、詩作における辛苦を歌う中晚唐期の詩

人達の作品と同列に扱うことは出来ない。ただ、勉学の回想にせよ、こうした労苦を歌った例は孟浩然以前には見られず、その意味では貴重な作品である。

- (19) 似た名前の詩人としては、盛唐では裴迪、中唐に張祐<sup>一作</sup>がいる。共に苦吟で知られる人物であり、あるいはそのいずれかの誤記とも考えられるが、管見の四部叢刊本・說郛本・龍威秘書本等の『雲仙雜記』は、すべて「裴祐」（一に誤って「裴祐」）に作る。また、明・張鼎思の『琅邪代醉編』卷三五にも同じ記事を引くが、ここでも「裴祐」となっている。

- (20) もっとも、入谷仙介氏の『王維研究』によれば、他の資料は彼がむしろ「速吟」タイプだったことを示しているようである。氏も指摘される通り（同書四一七〜九頁）、詩題の内に数例、「走筆」「座上作」等の語が見られることなどもその証拠であろう。ただ、そのことは、王維が「苦吟」と全く無縁の詩人だったということを意味するものではない、必ずしもない。自明のことではあるが、一人の詩人の作品には、即興のものから長い推敲の時間を要したもので、様々なレヴェルが存在する。例えば、「苦吟」で知られる賈島にも、「口号」と題する作品がある。

- (21) 類似表現を頻用する詩人としては、例えば岑参がおり、新免恵子氏の論文「岑参の詩について―同一表現の多用―」（『日本中国学会報』第三三集）に詳しい。先人の詩句の借用の例としては、早く唐・李肇の『唐国史補』巻上に、「（王）維有詩名、然好取人文章嘉句。『行到水窮處、坐看雲起時。』英華集中詩也。『漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝。』李嘉祐詩也。」といった指摘がある。また、王昌齡には、頻用の傾向・借用の例のいずれも見られる。

- (22) 早くは宋の洪邁の『容齋隨筆』にすでに偽作説が見られるが、最近の論考では、曹樹銘氏の『李白与杜甫交往相關之詩』（台湾商務印書館・人文庫）第一章・附考の「李集外与李白及杜甫兩不相關詩」がある。このほか、注(17)に挙げた「遺興」詩などにも、そうした価値意識が窺われよう。

- (24) 例えば、『論語』泰伯篇の「天下有道則見、無道則隱」、微子篇に見える逸民・隱者に対する評価、あるいは『孟子』尽心篇の「窮則独善其身、達則兼善天下」といった思想などに、それは現われている。

たといえば、次のような例が挙げられる。

暮秋宿友人居 無可

招我郊居宿、開門但苦吟。 ……

苦吟 貫休

河薄星疎雪月孤、松枝清氣入肌膚。因知好句勝金玉、心極神勞特地無。

酬答退上人 齊己

青衲幾臨高瀑濯、苦吟曾許斷猿聞。 ……

謝人自鍾陵寄紙筆 齊己

故人猶憶苦吟勞、所惠何殊金錯刀。 ……

(Mitsuhito OKADA 國語教室 Dept. Japanese Language and Literature)